佳作

登山から得たもの

茨城県 茨城県立水戸第二高等学校一年　田口 菊かり

昨年の夏休み、私は家族四人で北アルプスにある白馬岳に登山することになった。登山はもともと父の趣味で、私は行くまで正直あまり気が進まなかった。それまでも何度か登山に連れて行ってもらったが、いつも途中の辛さや大変さの方が大きく、特に悪天候の中登頂した時の何も眺望がない登山は、私にはただただ辛いだけの体験にしかならなかった。

今回は、途中山小屋に一泊してから白馬岳を登頂する行程だった。目指す白馬岳が三千メートルに近い高山なので、高山病や私達の体力・技術を考慮してのものだった。まずは初日から、山小屋までの間にも大きな岩場の直登があったり、雪の残る滑りやすい斜面を登ったりと私にとってはかなりハードなコースだった。大きな岩場の続くところは足場が悪く、両手を使ってよじ登るような感じで、滑らないように細心の注意を払いながら緊張して登った。そしてやっと目指す赤い屋根の山小屋が見えた時はとてもうれしく、喜びと同時に安心感を覚えた。

そして二日目。いよいよ白馬岳の山頂を目指す日となった。残念ながら雨天。しかも強風という悪天候の中のスタートだった。宿泊客の中には登頂をあきらめて下山するグループもあり、私はとても不安になった。でも家族で話し合い、とりあえず引き返すことも視野に入れながら出発することにした。家族みんな登頂してみたいという気持ちは強かった。私もせっかくここまで頑張ったのだから、登頂をあきらめたくはなかった。

しかし、実際にスタートしてみると、前方正面から雨まじりの強風が私達を襲ってきた。小柄な母と私は何度も強風に体をもっていかれそうになり、父や姉に助けてもらいながら一歩一歩進んでいった。片側が崖になっている所は、なるべく崖から離れた所をみんなで手をつないでゆっくり歩いた。急な登りが続き、途中で足を止めてしまうことも多くあった。頂上までの道のりの険しさに絶望し、先の見えないこの道がいつまで続くのかと嫌気がさし、あきらめたくもなった。やはり私も登頂をやめて下山すればよかったのではないかと後悔もした。でも、そんな私を見て父は、辛い今こそ一歩一歩を大切にゆっくりでいいから前に進もうと助言をしてくれた。私はその言葉通り一歩一歩頑張った。平均的なコースタイムからは大幅に遅れたゆっくりしたペースではあったが、姉が雷鳥の親子を見つけてくれたり、母がきれいな高山植物を教えてくれたりと、家族みんなでくじけそうになる私を励ましてくれた。

そして、やっとの思いで登頂。私達四人はとても感動し、みんなで大声で万歳をした。でも悪天候のため周りは真っ白。まるで雲の中にいるかのようで何の景色も全く見えなかった。本来は三百六十度の素晴らしい展望があるはずなのにとがっかりする父の横で、私は全く残念な気持ちがしなかった。それよりも、登頂することができたという満足感でいっぱいだった。私には真っ白い景色の中に美しい山々の景色がしっかりイメージできた。本当に頑張ってきてよかったと心の底から思った。

私はこの登山の経験を通してあきらめないことの大切さを知った。道のりは遠く、本当に先が見えない時でも、あきらめず一歩一歩努力することが必要なのだと思う。そうすれば、もし良い結果につながらなかったとしても、自分が頑張ったことに対する満足感が得られると思う。そして、忘れてはならないのは、周りで自分のことを支えてくれる人達の存在である。登山も私一人で頑張ることは決してできなかったと思う。家族みんなで支え合い、励まし合ったことで、登頂という大きな目標を達成することができた。

私はこれから大人になり、生きていく中で、大きな困難にあったり、目標をあきらめたくなることもあるかもしれない。そのような時は、この登山を通して得た経験を思い出し、周りの人達に相談したり、アドバイスを受けたりしながら、決して目標をあきらめずに困難なことに立ち向かう勇気を持ちたい。そして、自分の力で一歩一歩努力していくことを忘れないようにしたいと思う。

このようにして私が登山で味わった感動体験は、私の中に特別な記憶として深く刻まれ、思い起こすたびに私を励まし、自己実現に向けての歩みに導いてくれるものと思われる。